OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	〈なるべし〉という表現のこと : 〈自記〉と〈他記〉とのあわい
Author(s)	荒木, 浩
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1994, 28, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47837
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈なるべし〉という表現のこと

――〈自記〉と〈他記〉とのあわい――

荒木浩

一

『曽祢好忠集』は、一連の沓冠歌（420～）の序文的な文章として、次の如きを付す。

これは、この雨の下の、神代より人の心の、浅き影さへしるき山の井に、みかねごとよせじ（引用者注、新編国歌大観は「よせし」と澄んで下に続ける）難波津（に）咲きて匂へる花と、多くの人の口のはに、覚ゆる事を記したるなるべし。（神作光一・島田良二『曽禰好忠集全釈』）

この文章――本文は若干ことなるけれども――を『古典大系　平安鎌倉私家集』は、頭注に於て、間然するところなく「後人の補注」と断定した。理由は、おそらく、その筆勢を印象づける〈なるべし〉という末尾表現にある。

さてこの序文は、後人の書いたものか、好忠の書いたものか判明しない。「記したるなるべし」によれば、後人の筆である。（前掲『曽禰好忠集全釈』）

しかしながら、その『全釈』はこう説明を続ける。

ただし好忠の他の序文の末尾を考え合わせると、貞元二年頼忠前栽合「名を好忠と申すを頼みて奉るべしと侍るなるべし」三百六十首の序的な役割を有する春の長歌「人も見るがに」（底本）「人も見るかねと思ふ心のあるにぞあるらし」（為相本）百首序「わが身人とひとしきとぞや」（底本）「人にことなるとぞや」（為相本）とある。為相本三百六十首の春の長歌は第三者的表現であるので、好忠自身が第三者の立場から婉曲的に書き記したとも解せる。好忠の筆と見るのが穏当か。…

このように屈折した説明がなされる所以は、かの文章が、内容的には、〈自記〉とみて然るべき記述なのに、〈なるべし〉と閉じられている事にある。一見背反するその事象を整合的に説き明かそうとして、好忠が、別人の注記を装うスタイルで自らの歌群の説明をしている、という可能性をも併記し、類例が提示されているのだ。

「ただし」、『全釈』が示した好忠の別の序文的文章にある〈なるべし〉は、本文につけば、明らかに好忠自身が、自分を召してくれた頼忠の思惑を忖度、推量している形であり（解釈は『古典大系　歌合集』参照）、いまの例と

は事情を異にする。長歌についてもすぐさま序文的な解説の散文と同一視することには、慎重でなければならないだろう。とはいえ、ことは『好忠集』にとどまらず、ある文章、もしくは注記が、作者〈自記〉であるのか、あるいはそうではなくて〈他記〉[1]であるのか、その認定は作品読解のもっとも重要なポイントの一つである。そのポイントに、〈なるべし〉という末尾表現があることを気づかせてくれる点で、如上の指摘は着目に値する。

同様の事情は、時代も、文献としての性格をもまったく違える、次の文献にも現れる。

…うらみを、ひとりのこすべきにあらねば、身づから鳥のあとをつけつゝかすかに思ふこゝろをのぶといへども、まことのありさまを後素にあらはして、同もらし申すなるべし。(『絵師草子』、日本絵巻物大成他)

こう結ばれるこの草子、以前は「最後の「申すなるべし」というところでなんとなく他人事のようにぼかしてはいるが、全体をみると絵師自身の述懐とも受けとれるので、これは作者である絵師が自分の身の上を描いたものとされてきた」(むしゃこうじみのる『絵師』)。しかし、その後、田中喜作氏の丹念な読みによって、本書は「一篇の作り物」であり、右の一節も「物語のあや」、すなわち作品の趣向とみなされることとなった(「絵師の草子に就いての考」『画説』昭15-4)。もっとも、「物語のあや」としての解釈自体も、必ずしも確定的ではない。いうまでもなく、〈なるべし〉という末尾表現の印象が、そこに絡んでくるからである。この草子、確かに「叙述の体が珍しくも一人称的で、自己の経験を記述する体を採つて居る」(田中氏前掲論文)とも見える一方で、「第三段の後半などは作者自身の述懐ともとれる叙述だが、全体を通してみると、第三者としての表現の方が多いといえる。ことに

各段の結びにはそれが顕著である。第一段では、「其日はあしたよりのみくらし侍りけるとかや」と、伝聞・推測といえる叙述をし、第二段は「このともがらを見るに、めをくるる心のうち、ただをしはかられたり」と、まさに他人からの推量で終わっている。第三段にいたっては……「我道のわざなれば、まことのありさまを後素にあらはして」と自分のことのように述べながら、すぐつづいて、「同（じく）もらし申すなるべし」ときわめて矛盾した結び方をしている。この核心となるべき終末の部分の叙述は、どうみてもこれが主人公である絵師自身の立場からの表現とは考えにくい」（武者小路穣『絵巻の歴史』）。

それでも、なお次のような見方で読みたくなる、そうした文脈をたしかに本書は持っている。

私は、この絵巻が、実在の絵師が窮状を絵巻にして訴えたものだと推定する……絵巻の最後は……当時の訴状の書き方によく似ている。…

B　絵巻の訴状という考えはおもしろいと思うんだが……（引用者注、武者小路氏と同文の第一段、第二段末尾の引用、略す）と詞書にあるのをみると、どうも他人事みたいなんだよね。それに最後は「同もらし申すなるべし」だろう。ここは「申すべく候ふ」とこないとね。

A　そこが一番問題になるだろうね。しかしこの訴状を書いたのが別人と考えればどうだろう…(2)

以上二例、〈なるべし〉という表現が示す解釈の位相、いわば、〈自記〉と〈他記〉とのあわい、ともいうべき分岐を見た。このことは、以下見て行くように、実は〈なるべし〉をめぐって、しばしば繰り返される状況である。

しかし今見た分析はいずれも〈なるべし〉という閉じ方が、本来「別人」の推量表現である、という前提を疑わずに、その範囲内で整合性を求めており、結果、いささか解釈を無理にねじ曲げてはいないか。はたしてその前提は動かないのか、本稿ではささやかな調査をふまえ、こうした〈なるべし〉という表現の在処を考えてみたい。

二

さて、古代以来の〈なるべし〉の意味領域を、竹内美智子氏は次のように概括する。

> 奈良時代における「べし」は……客観的に事の運びを推定するもの……しかし、平安時代に入ると、奈良時代における「べし」「まじ」の用法の外に……話手の意志や意向を表わす主観性の強い用法があらわれた……「べし」の場合は、これに加えて……単なる推量を表わす意味でも用いられるようになった。……「べし」が「体言なり」や「連体なり」の下に用いられる場合には、「べし」は普通この意味になる。この用法は、物語などにおいて、客観的な叙述の流れを、一時的に……または最終的に……語り手の推量の世界へと持ちこむ役割を果たしている。(『岩波講座日本語』7「助動詞（1）」、『平安時代和文の研究』[3])

だが、その「語り手の推量」の意味領域は相応に広い。例えば、「物語などにおいて」「語り手の推量の世界へと持ちこむ役割」といえば、「草子地」が想起される。中野幸一氏は「草子地攷（一）」に於て「推量の草子地」を立項し、「この類に属する草子地は、作者が物語中の事柄や人物の言動・心情などを推しはかって語っている姿勢を

示すもので、その性格上、多くは推量の助動詞を伴っている……その間接的な推量表現の特性を活かせば、実際には読者の立場から推察できないような人物の細かい心情の説明や、朧写法のような高度の文章表現も可能である」とまとめ、その内の「説明的推量」として、〈なるべし〉の用例他を挙げている。

これは推量の草子地の大部分を占めるもっとも普通な形で、物語中の事柄や人物の言動・心情などについて推量の形で説明を加えたものである。何かについての説明を加える場合、きっぱりと断言しないで、多少の余裕を残して推量にとどめておくやり方で……表現技巧の上からは一種の間接叙法で、婉曲的な性格をふくむものである。(4)（中野幸一「草子地攷（一）」『早稲田大学教育学部　学術研究』一七号）

一方、〈他記〉による「説明的推量」が、他者のテクスト自体に対して為された場合、それは、読み手としての解釈、または語り手としての注釈の言語として現れることになる。

この花は、梅の花を言ふなるべし。（『古今集』仮名序古注、「難波津の歌」、新大系）
ヲホサヾキノミカドハ仁徳天皇ナリ……カクハヨメリケルナルベシ。（教長『古今和歌集注』、古典全集）
水の尾の御時なるべし。大御息所も染殿の后なり。（『伊勢物語』六五段、角川文庫）
又考伊勢物語云……水尾御時ナルベシ。大御息所者染殿后ナルベシ云々。（顕昭『古今集注』17歌注、歌学大系）

予想されるように、注釈の形に於ては、推量である側面よりも、むしろ、説明的な意味相の強い形も散見する。

その六種の一つには、そへ歌……と言へるなるべし。二つにはかぞへ歌……と言へるなるべし。（『古今集』）

百余人ぞ集まれる。此は、家近き者共の、疾く聞きて馳せ集れるなるべし。家遠き者共は、未だ聞かねば、遅く来たるなるべし。（『今昔』二五―5、古典集成）

其れに乗りて……追いて行く。心は「此盗人は……去ぬるなめり」と思ひて、行くなるべし。（同二五―12、「それで追って来たのである」、集成傍注）

其後此児又病付テ、大事ニ成テ物狂ケレバ、一間ナル所ニヲシコメテ置タルニ、人ト物語ル声シケルヲ怪ミテ、父母物ノヒマヨリ見ケレバ、大ナル蛇ト向テ物ヲ云ケルナルベシ。（『沙石集』七―2、古典大系）

それでも、これらは、〈なるべし〉についての総論を踏まえて違和感はない。しかし、そうした、「何かについての説明」が、自己の著作、もしくは、書く行為に、向けられている例がある。それはもはや「語り手の推量」という範疇では、捉え難いように思う。

是は皆人の知りたることなれども、まだはかぐ〳〵しくもならはぬ人の為に粗かきおくなるべし。（『新撰髄脳』、歌学大系）

もしほ草、かきあぐべきよし、かねてきこゑさせければ、あまのぬれぎぬおもひみで、またふでとれるなるべ

し。（『閑居友』[5]跋、中世の文学）

この叙法の含意するところの一端は、次の用例を参看することで明らかになる。

いと書き続け難げなる事どもなれば、ただ片端許をだにとてある、ものまねびなるべし…（『栄花物語』二十）

稚き人などにもかゝることこそはあれとも見せんとて書きとゞむれば……人のせよといふ事にもあらず、物知らぬに、人のもどき、心やましくもおぼしぬべき事なれど、何の書き留めまほしきにか。過ぎにし事も今の事もしどけなし。かく所々に書き留むるは、たゞなるよりは人にももどかれむとなるべし。（同三六、古典大系）

『栄花物語全注釈』が前者を「このあたり作者の謙辞」と推すように、如上の文脈を前にすれば、自らの著述行為について語る部分に於て、〈なるべし〉の叙法が、文脈上、謙退の表現として、用いられていることは明白である。『新古今』の仮名序にも、代筆ながら、同様の表現が見える。

…このうちみづからの歌を載せたること、古きたぐひはあれど、十首にはすぎざるべし。しかるを、今かれこれえらべるところ、三十首にあまれり。これ、みな人の目たつべき色もなく、心とゞむべきふしもありがたきゆへに、かへりて、いづれとわきがたければ、森のくち葉かず積り、汀の藻くづかき捨てずなりぬることは、道にふける思ひふかくして、後の嘲りを、かへりみざるなるべし。（新大系）

これらは、すでに成って客観的存在として現前した自著への「推量」である点で、次の表現と通ずる。

生年已八十四の年、人にもみせだにあはせ侍らず、たゞあさきみづぐきの跡にまかせてしるしつけ侍りにしかば、いかばかり僻事は多く侍らむとおぼえ侍るを、（『古来風体抄』再撰本跋文、歌学大系）

愚かなる心に任せて、わづかにおもひえたることをかきつけ侍りし……見ぐるしけれど、ただおもふまゝのひがごとにはべるべし。（『近代秀歌』自筆本、歌学大系）

老のはぢをかくものならし。（『わらんべ草』跋、岩波文庫）

こうして、〈なるべし〉という末尾表現の或るものが、類型的に、〈自記〉の著述（行為）に対して、謙退のスタンスを示す〈自記〉の文体であったことが確認できるのである。

三

しかし次のような例は、同様な文脈ながら、いささかニュアンスを違え、謙辞の表現が表立っては見えない。

その心をのべて御手毎に奉り給へとすすむれば、かくあながちにの給ふも観音の御すすめにやとおぼえ侍れば、「……あらあら申すべし」とてかたりし事どもをなむしるしおけるなるべし。（『野守鏡』序、歌学大系）

…かつ〳〵いささかえらび侍る。これらぞ歌の本にてもあるべき。およそは、いづれもよろしけれども、其中

にも殊によろしきをえらび出して書きとゞむるなるべし。（『桐火桶』、古今歌抄出の説明、歌学大系）

ここにさいつごろ、住吉にまうでたりし時、月の夜、おきなのものがたりしことばのすゑを、もらさずかきあつめはべるなるべし。（「書陵部本和歌知顕集」、片桐洋一『伊勢物語の研究』）

みそむつの歌仙のすがたをゑらびて……のむねをしめすなるべし。（『釈教三十六歌仙』、国文東方仏教叢書）

ここでは、著者自身が最も知悉しているはずの自著の成立ちについて、しかも、『桐火桶』の場合などは、「殊によろしきをえらび出し」たと明言しながら〈なるべし〉と叙されている。敢えて、「推量」で説明すれば、その推量は、為し終えた著述行為を、未知のものとしてうけとる読者の立場に則して、なされている。それは、著者が「他人事」のように客観的な位置どりで、自らの著述に対する「説明」を行っている、ということであり、とりもなおさずそのことは、見てきたところに従えば、「説明」が、対象読者に向かって、謙退の姿勢で、丁寧な、「婉曲」の筆致が「客観的に」なされている故と推定できる。こうした「説明」の言い回しは、「ならし」というかたちながら(6)勅撰集の序文にも見え、

いまのえらべるこころは……みはかくれぬれど、なはくちせぬものなれば、いにしへもいまもなさけある心ばせをばゆくすゑにもつたへむことをおもひてえらべるならし、（『後拾遺集』序、新編国歌大観）

みことのりをもうけたまはれるならし。（『千載集』序、岩波文庫）

勅撰集の序文を意識して書かれている『十訓抄』序も、同様の書きぶりである。

かゝるにつけても、もしほ草かきあやまれることのはもかずつもり、梓弓引見んひとの嘲も、はづれがたくおぼえながら、志の行所たゞにはいかでかやまむとてならし。（岩波文庫）

ところで、次の例は、明かに、自分で名付けたはずの自らの著作の名前の由来を〈なるべし〉と語っており、

是を野守鏡となづくる事は、はし鷹のそれたる事どもを思ひ思はずよそにみてしるす義、又野守のごとくいやしき身に是をかゞみたる心、またはいにしへの野中のしみづをかゞみとして、もとの心をあらはす義なるべし。（『野守鏡』）

ただ池水のいひいづる口にまかせ、あら小田のつくりえたるを事とせるなるべし……名付て下草といふ、よろづの草子のしもにて侍ればなるべし、（『下草』（今川了俊）、未刊国文資料）

さらに、次の如きは、書名の紹介自体が、〈なるべし〉と叙されているが、

人なみ〳〵に此道に力を入て、一巻の文をつくるべき事をいとなむほどに、さいはいに仏の御前の物語しるして、名を宝物集といふなるべし。（「宝物集」第二種七巻本跋文、新大系）

巻十あまり二つにわかたせ。なつけて四季の物かたりといふなるへし。（『歌林四季物語』一、続群書類従）

後人の嘲をも不顧。浮べるに随て何と無き水茎のすさみ、定無浮草の言の葉を書集めて、甲斐なかるべけれども、常に是を身に随て、有心人、道心者に見すべければ、名を妻鏡と云なるべし。（『妻鏡』、古典大系）

一見〈他記〉の物言いにうつるこれらも、もはや、文脈から類推して、同前の〈なるべし〉だとわかる。ただし、かなり違和感のあるこの形式(7)、その由縁を考える上で、『世諺問答』の序跋の表現が参考になる。

おきなのこたへ侍りしを。ひとつももらさずかきあつめて。世諺問答となづけ侍るなるべし。（序、群書類従）

あまのもくづをかきあつめて。しづがたく火のほのかに。世の諺をあらはさんとする事しかり。（跋）

序文で、〈なるべし〉と閉じられた部分が、跋文では「…事しかり」とあって、対応している。この言い方なら、用例には事欠かない。

するすみもかつあらはれ、おいのふでのあともいとゞみだれながらしるしをはりぬるになん。この集をば名づけて古来風体抄と名づくといふことしかり。（『古来風体抄』初撰本。再撰本「しかなり」）

なづけて新勅撰和歌集とすといふことしかり。（『新勅撰』序、岩波文庫）

序文に於て、書名を説明する箇所、もしくは、末尾に、現れるこの文言は、同じ箇所に現れる、漢文序の「云爾」という助辞に対応する。

都為三十巻名曰文選云爾（『文選』序、宋本六臣註文選）
命為池上篇云爾（白居易「池上篇并序」、『角川文庫　方丈記』）
余撰此文意者。為将不忘先哲遺風。故以懐風之云爾。（『懐風藻』序、古典大系）
篇目を住して、ね覚記とがうする事、しかなり。（『寝覚記』序、古典文庫）

歴史的に、この助辞には、「シカイフ」「イフコトシカリ」という訓が宛てられる（『二中歴』巻一二、築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』）から、「いふなるべし」とあるものが、直接的にこの助辞の訓読語として対応していたわけではない。[8]が、『後拾遺集』序文が「…えらびをはりぬることになんありけるといへり」と、『発心集』序は、「にやといへり」（角川文庫）とその序を閉じることから類推すれば、「いふなるべし」は、いわば「云爾」の代替として、和文的なコンテクスト、ニュアンスを併せ表現しているものとすべきだろう。先引『新古今』仮名序と真名序との対比（「道にふける思ひふかくして、後の嘲りを、かへりみざるなるべし」、「偏以耽道之思、不顧多情之眼」）、また『十訓抄』序の大尾「しるしをはることしかなりとなん侍」（「侍」は、書陵部本などには「といへり」）の付加は、その辺の事情をかいまみせる例ともいえる。

序の文体とは、「其善叙事理」（『文体明弁』、中文出版）、すなわち「この文体は客観的に事の端末を叙するのが

本旨である」（大曾根章介「本朝文粋の分類と排列（下）」（『国語と国文学』昭43―6）。序文の如き、献呈者を持ち、ある種のかしこまりの態度でもって、「客観的に」かつ謙退をこめて「婉曲」に自らの著述行為を語る文体基調を、和文に移しかえる時、〈なるべし〉という文末は、まさに相応しかったはずなのである。

五

駆け足ながら見てきた〈なるべし〉をめぐる如上の概観は、以下の不確定な例にも、何らかの解答を与えるかも知れない。先ず『宇治拾遺』序。

> さるほどに、今の世に、又、物語書き入れたる、出来れり。大納言の物語に、もれたるを拾ひあつめ、又厥后事など、書きあつめたるなるべし。名を宇治拾遺の物語と云。（新大系）

この序文は、従来、「この文が原著者の書きざまでないことはいうまでもない」（古典大系（旧）補注）などといわれてきた。その印象は、ひとつには、この序文が、いかにも「他人事」のような筆致でかかれていることにあるのだが、一方、その書きぶり故に、「作者が書いた序文」「『宇治拾遺物語』の序文として書かれたものと見」る視点からは、「朧化」の手法という見方もできる（島津忠夫「宇治拾遺物語の序文」『中世文学』28号）。いまこの問題を詳述するゆとりはないが、すくなくとも引用した部分については、〈なるべし〉という言い方を含めて、これまで見た序文の作法に正確に適応している。(9)

今一つは、歌集の左注に現れる〈なるべし〉である。

尚この百首には毎首歌意を推広演繹したる註文を加へ……但し釈文の末に「斯くやと思ひよそふるにや」「これを思ひよそへたるにや」「この喩を思出でゝむかふぞと知るべきにや」などと記せるを見れば、この推演せる文は、著者の作にあらで、後人の加へたるなるか、後勘を竣つ。（釈教歌詠全集）

といわれながらも、今日ほぼ自注であろうとされる『法門百首』の左注（川上新一郎「『法門百首』の考察」、『王朝の歌と物語』所収参照）に数例ある、〈なるべし〉。

雲とみしとほちの里のうの花はけふ我宿のかきねなりけり
……いま初住の覚りひらくを。やどのかきねに咲とはいふなるべし。（群書類従）

また慈円『拾玉集』、「風になびくふじのけぶりにたぐひにし人の行へは空にしられて」（5159、新編国歌大観）の「左注に、西行の「第一の自嘆歌」のこと」が「しるされている」（奥野陽子「風になびく――西行第一の自讃歌について――」『叙説』昭57・10）部分、

又、風になびくふじのけぶりの空にきえて行へもしらぬわが思かな、もこの二三年の程によみたり、これぞわ

が第一の自嘆歌と申しし事を思ふなるべし、（5160の後）

慈円と西行との関わりを考える上で重要とされるこの記述が、「この左註は、「思ふなるべし」とある点などに、後人又は第三者の手になるものと理会する可能性も確かにあるが、一応、慈円自身の後になってからの注記故のものと考えておく」（松野陽一「西行の「諸社十二巻歌合」をめぐって」（『平安朝文学研究』2―8）、あるいは「「を思ふなるべし」という、普通は他人が外から注釈するときに用いる文体も、実はそうではなくて、西行の生涯を今ここで身近に感じている慈円の心を表現していると考えられる」（奥野氏前掲論文）、などとやはり〈なるべし〉によって解釈を遮られていた。それを鋭く読み解いた、山本一氏の解析の事。

「……なるべし」という伝聞的な表現による左注が、他人歌に対するほかに慈円歌にも二箇所用いられているが、それらの箇所のみ後人の手が入っていると考えることは難しく、自注の文体のひとつの形と処理するほうがよいと思われる。（山本一「西行晩年の面影――慈円との交流から――」『論集　西行』(10)）

しかしながら、本稿には、冒頭の『好忠集』、『絵師草子』を含めたこれらすべてが、〈自記〉である、と断定する事は、残念ながら出来ない。ただ、見てきた例に鑑みて、これらを〈自記〉であると判定することにおいて、〈なるべし〉の存在は、傍証にこそなれ、決して、反証にはならない、という事が言えるのみである。なにしろ、「…なるべし」と閉じる〈自記〉の文体は、一見、「仏、この国ばかりにいでたまひて……二十五有のありさまををしへ

たまふ、されば恵心院の源信僧都もこれをとりなしつつかきをけるなるべし」（『拾玉集』、5732の後）というような、本当に他者の著述について語っている〈他記〉の場合と、文調としては区別がつかぬような形、と言う意味での「客観」性の文体を、その本来の姿としているからなのである。

注

（1）熟さない言い方であるが、以下の論述の対象を明確にする意味をも含めて、〈自記〉に対して、他者が何らかの形で記し、もしくは付加した文章を、いま総称して〈他記〉とかりに呼ぶ。

（2）五味文彦『中世のことばと絵』。該書に対して、黒田日出男氏の「絵巻をいかに読むか」（『岩波講座　社会科学の方法』Ⅸ）という批判がなされ、その後、『思想』誌上で論争が展開されているのは、周知の通り。

（3）「「連体なり」に下接している「べし」は、表現主体の推量判断を主体的に表現しているものである」との北原保雄『日本語助動詞の研究』第五章の見解も併せ引いておく。

（4）『今鏡』は全編にこの〈なるべし〉を頻用し、叙述の基調を為す。

（5）『閑居友』は、これ以外にも数例の〈なるべし〉をもって、自分の説話採録を叙す。本稿〈付記〉参照。

（6）「ならし」と〈なるべし〉の連続については、糸井通浩「助動詞の複合「ならむ」「なるらむ」――散文体と韻文体と――」（『国語語彙史の研究』十一）、参照。

（7）「かげろふの日記といふべし」（『蜻蛉日記』上末、新大系）、「名づけて、歎異抄と言ふべし」（『歎異抄』、古典文学全集）、「神皇ノ正統記トヤ名ケ侍ベキ」（『神皇正統記』、古典大系）というのも類似した形であるが、「べし」単独のこれらは、〈なるべし〉の類例とはひとまず別して考えたい（竹内美智子氏前引部参照）。

（8）川口久雄『古典大系　菅家文草　菅家後草』がしめす、「イフナラクノミ」と言う訓（『菅家文草』巻一、〈八月十五夜、厳閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黄憲。并序〉大系補注四三、参照）はその意味で興味深い。又、坂口勉『今昔物語の世界』が、『冥報記』の「云爾」と『今昔』の「トナム語リ伝ヘタルトヤ」との影響関係を推測することも、その当否はともかく、「云爾」の意味測定には参考になる。

（9）問題は、『宇治拾遺』序文総体の読み直しを提示して示す必要があるが、今は一先ず、問題提起にとどめる。

（10）『拾玉集』の〈なるべし〉については、山本一氏の御教示を得た。

〈付記〉本稿は、平成四年度大阪大学国語国文学会総会（一九九三年一月十五日）に於て、「〈なるべし〉という叙法をめぐって」と題して講演した内容の一部を補正して成稿したものである。その発表は本来『閑居友』を中心とする中世和文説話集の文体の一端について〈なるべし〉を切り口に分析を及ぼそうとしたものだったが、紙数の制限もあり、今回はこうした形となった。別稿は後日を期す。発表後、御教示を賜った方々、就中、『拾玉集』他に関して、有益な御教示をいただいた山本一氏に、深謝いたします。

（文学部助教授）